

北海道における七夕行事「ローソクもらい」を巡る先行研究史と現況調査報告

波田尚大・尾曲香織

Key Words

七夕 (Tanabata)、ローソクもらい (Rōsoku-morai)、札幌 (Sapporo)、利尻 (Rishiri)、
歴史公文書 (Historical archives)

1 はじめに

北海道内の七夕行事では、ローソクもらいという習俗が行われることがある。その概要を『北海道大百科事典』下巻に記載の小寺による「七夕」の項目から引用する(小寺 1981: 52)。小寺は『北海道の祭事習俗』や『北海道の民間信仰』などで北海道の民俗文化についてまとめており、道内の各地で民俗調査を行っていた。

旧暦では、7月7日、新暦になってから北海道ではひと月おくれのこの日に行われる。(中略)「少女には技芸の上達を、男児も字が上手になるよう祈って書いた短冊を柳の木(本州では竹)などにぶら下げる風習が今日もつづいている。短冊にはいろいろな色紙がつかわれ、思い思いの願い事、歌や句もみられる。夕方になると子供たちは工夫をこらした瓜提灯や行燈などをぶら下げ「ローソク出せ出せよ、出さぬとくちやくぞ」とはやしたてながら戸ごとに回った。

七夕の習俗の多様性については、田中が『年中行事事典』で「星祭りにかかわるもののほか、盆行事関連の水による穢れの祓えや農耕儀礼的要素などがみられ複雑である」ことを指摘している(田中 1999: 242)、ローソクもらいもまた、幾つかの儀礼の要素を確認できる。しかし、なぜ、このような内容の行事が北海道で行われているのか、といった根源的な問いには、幾つかの推論を立てることはできるものの、答えることはできていない。小田嶋はローソクもらいの北海道における分布図を作成しており、道内118地点でその存在が報告されている(小田嶋 1996: 171)(図1)。小田嶋が提示したように、北海道内のほぼ全域で分布しているこの行事について、道内の基礎情報は蓄積しておらず、また現在の実態も明らかでない。そのため、本稿では先行研究をまとめ、近世・近代に記された七夕行事の

様態を整理し、令和7年度に波田が実施した利尻町・利尻富士町での調査、尾曲が実施した札幌市白石区・東区での調査報告を行う。利尻町・利尻富士町では、2000年頃に北海道開拓記念館の学芸員であった矢島が民俗調査をおこなっており、現在との比較を行うことができるため、札幌市白石区・東区では、令和7(2025)年にローソクもらいを実施しており、また都市部での実態を明らかにするために調査地として設定した。「4 札幌市白石区の事例」と「5 札幌市東区の実例」を尾曲が、それ以外を波田が執筆した。利尻町・利尻富士町では既にローソクもらいは実施されていないため、文献調査及び話者の記憶にある往時の有り様を記録した。札幌市白石区・東区では現在行われているローソクもらいの実態を、帯同しながら記録した。

2 ローソクもらいを巡る先行研究史

(1) 柳田による北海道から佐渡島への伝播について
柳田は、『佐渡年中行事』の序文において、佐渡島のローソクもらいの歌詞を例に挙げて、次のように述べている(柳田 1938: 12-13)。

岩船郡以北、荘内秋田へかけての広い地域に行われて居る行事と、かなり近いものが佐渡にもある。この中には稀には彼方から持って来たというものもある。たとえば河原田の七夕の晩に、蠟燭出せ出せ、出さぬとくちやくぞというのなどは、北は北海道の旭川の附近まで、又日本海側には処々で流行って居る。よほど子供には痛快な言葉のようだが、カッチャグという動詞はこの島ではあまり聴かず、又蠟燭という商品よりも古くから、この風習があった気遣いは無いから、多分は船頭か誰かに伝授してもらったものである。

以上のように、佐渡島の河原田で行われているローソ

クもらいの習俗は、北海道からの北前船によってもたらされた行事である可能性を指摘している。

なお、柳田が事例としてとりあげたローソクもらいの習俗は、中山が次のように紹介している（中山 1938：172）。

河原田では笹葉の竹に提灯や短冊をつけ、竹に短じゃく たなばた祭と言いながら、子供が夜持ち歩き、翌日海へ流した。又その晩 蝋燭だせだせ 出さねばかっちゃくぞと言いながら、蝋燭もらいに各戸へ行った。が、今は、昔相川でしたと同じに、竹に短冊提灯をつけ持ち歩き、翌日海へ流すだけになった。

昭和13（1938）年時点において、佐渡島の河原田ではローソクもらいの習俗は行われなくなっていたことが報告されている。

（2）蛸島による青森からの伝播について

函館市梁川町出身の蛸島は、自身も幼少時にローソクもらいを行っていた経験から、函館と青森県下の事例を基に、ネプタ（山車燈籠）やガク（長方形の燈籠）に使用するために行っていたローソクもらいが、北海道内に伝承されているローソクもらいの原形であることを指摘した（蛸島 1986）。北海道におけるローソクもらいは、ネプタを行っていないため、その目的を失い、「ひとり歩き」をしていると述べている。蛸島が提示した青森県下の事例では、「ローソク出せ出さねばカッチャクぞ」などの囃し立てる歌の文言が北海道内の事例と共通しており、原形と断ずるに足るものとする。その上で、なぜ現在に至るまで伝承されているのかについて、喧嘩及び小競り合いの発生、物を乞い歩くその行事内容から学校や警察などから規制が行われることもあるが、人々が祭りを彩るその喧嘩に魅力を感じていた点、行事の主体たる子どもたち自身が、物を乞い歩くことに、愉悦や快楽を感じていた点を挙げて、その理由を考察している。

（3）小田嶋による青森からの伝播について

小田嶋は、「ローソクもらい」の項目において、「箱館風俗書 附箱館月次風俗諸補拾」に記された行事が、青森県で「ねぶたツコ見てくれ」と子どもたちがねぶたを見せて回って歩く習わしと似ており、青森のねぶた流しに影響を受けたことを指摘している（小田嶋 1996）。近世の文献と青森県のネプタとの比較によって導き出された指摘であり、蛸島の研究は参照していない。学会誌ではなく、北海道の年中行事の概観を解説した『北海道の年中行事』に掲載されており、以後、ロー

ソクもらいについての研究では本文献が必ず引用されているため、後の研究者に与えた影響は大きいと言える。

（4）池田による青森からの伝播について

池田は、「「ロウソクもらい」の育ての親は？」において、ローソクもらいの習俗が青森県より北海道南部に伝播し、その後道内全域や南樺太（現サハリン）にまで伝わったという道内での広がりや様態を考察している（池田 2013）。広範囲に伝播した理由について、移住した人々に自分なりの文化をつくる力があつたのではないかと指摘している。池田は後に、科学研究費助成事業によって採択された研究課題「北海道地方で特徴的かつ広域的に広がった季節行事の生成と波及に関する研究」において本州での追加調査を実施している。

（5）山崎による函館市域のローソクもらいの実態調査

山崎は、平成23（2011）年度時点における、函館市域のローソクもらいの実態を、アンケート調査によって明らかにした（山崎 2013）。子ども達へ渡す物がローソクからお菓子が中心となっている中で、それでもローソクをあえて渡すのは、既に不必要となつていても、行事の元の形を残したい大人の意思が介在していることを指摘した。起源についても考察しているが、前述の先行研究と比較して新規性は認められない。

（6）佐々木によるローソクもらいの歌詞の検討について

佐々木は、囃子歌の歌詞の地域差が、人の移動によって生じたこと、同地域内の歌詞の差については予祝観念が人々から消えたことによって歌詞が消滅した可能性などを指摘している（佐々木 2022）。新型コロナウイルス感染症感染拡大時であったため、実地調査がままならなかった点が惜まれるが、ほかに、秋田県鹿角市花輪に伝わる花輪ネプタと、小樽のローソクもらいとの持ち物や燈籠の共通点について事例を挙げて比較している。また、戦前の小樽新聞に掲載されたローソクもらいの写真を5点掲載し、記事の内容についても紹介を行っている点は、従来試みられることのない調査手法であったと評価する。

以上のように、現在ではその起源や伝播の在り様を探ることは困難になっているものの、蛸島の研究のように、事例を示しながらその試みが行われていた。近年では、北海道における特徴的な年中行事の一つとして、子どもたちが乞う対象物や、歌詞などを分析対象とし、研究が行われてきた。

3 近世・近代に記された北海道の七夕行事

第1章で取り上げたように、近世・近代の史料を用いて、かつての習俗のあり様を探る試みは行われてきた。本章では、これらの史料に七夕行事やローソクもらいがどのように描かれているのかを、改めて確認する。なお、紹介する各文献は、先行研究により発見されたものであることを注記する。

(1) 松前奉行所勤務者か 文化4 (1807) 年-文政4 (1821) 年か『松前歳時記草稿』

『新北海道史』第7巻に翻刻が掲載されている。同書の解説によると、松前奉行所勤務者が幕領期に記したものと推測されている(北海道 1969: 605)。

七夕の祝事江都に似たり。寺子屋取分け祝ふなり。七夕の歌を笹へ付て建るを笹灯籠という。五色の紙又は桐葉などへ歌を書し、清川へ流す事もあり。手習ふ童子のなす業也。

七夕飾りをつくり、歌などを川へ流す行事で、寺子屋の子どもが行っていた行事であった。

(2) 松浦武四郎 嘉永3 (1850) 年「秘女於久辺志」

『三航蝦夷日誌』は上下巻で吉田による校注とともに刊行されており、「秘女於久辺志」は同日誌の附録である(松浦 1850: 494-495)。同書の解説によると、松浦による蝦夷地の観察記録・地誌であり、松前における年中行事が記録されている。

六日の日より市中手習師匠の家に而額とうろうと申ものを作り、是をもて子供等は皆縹子、緞子、またちりめん等の襦袢(禪)をして師匠の家の庭に群集して、太鼓・鼓・笛もてはやし立て七夕ホウイヤイヤヨと申事也。是も公科比は余程雑費を懸て市中さわぎ回(廻)りし由なるが、近比は其此の事を競べ見る時は大にひそかになりたりとかや。然れども他邦より行しものは其費用の多きことに驚けり。実に無用のことゝぞ思われける。

手習の師匠の家に子どもたちが集まって、額とうろうを持ち、歌を歌いながら市中を練り歩く様子が記録されている。「七夕ホウイヤイヤヨ」との歌詞が記録されているほか、以前より祭礼の様子が静かになっている点

や、多額の費用が必要なことが記されている。

(3) 蛭子七左衛門か 安政元 (1854) 年頃か「箱館風俗書」

『函館市史』史料編第1巻に翻刻が掲載されている。同書の解説によると、安政元(1854)年頃に、町年寄の蛭子七左衛門が箱館奉行に対して執筆した報告書であり、その一部に七夕行事が記されている(函館市 1974: 702)。

七月七日 七夕祭と相唱ひ、寺子や子供等の者より銘々額灯籠差出、竹に五色短冊結付、前日より子供等師匠々々え集り、太鼓・笛打ならし、町々囃子立押歩行、今昼頃右額灯籠海岸より相流し候仕来りに御座候。

寺子屋や子供たちが額灯籠を持ち、竹に五色の短冊を結び付け、寺子屋の先生の所に集まり、太鼓や笛を打ち鳴らして町中を囃し立てる様子が記録されている。終了時には、海岸から額灯籠を流していたとある。

(4) 平尾魯僊 安政2 (1855) 年か「松前紀行」

『函館市史』史料編第1巻に翻刻が掲載されている。同書の解説によると、安政2(1855)年に、弘前出身の文人で画家の平尾が松前を訪れた際に記述したものであり、同地における七夕行事の詳細が記載されている(函館市 1974: 293-294)。

七夕祭は隔年に在て(一年は八幡祭、一年は七夕祭也)最も壯観なる物なり。男女の小児鬢中にあるもの、貧富共みな一つづつこしらへる事とぞ。其形は吾邦(津軽)の額ねぶたと云ものにて、大さは大略一尺三、四寸に、二尺四、五寸にて、小縁と大縁は表面許に飾り、額面には七夕祭り・二星祭りなどと文字を書き、両脇は画を模し、後面は何氏の間人何の誰と、自分々々の姓名を記し、額上には葉竹をさして、夫に五色の紙にて作りたる短冊を数十片結びつけ、甚だにぎやかなる制作なり。其外富有の者は大きくこしらへ、作りものは吾が邦と同容なれ共、台は祭の台のごとくに組んで、其内にて太鼓・小太鼓・笛・鉦・三味線などにて拍子とり、予がねぶたの囃子とは大に異にして勇ましからず。偕、此大小の物、夫々の師匠の邸前に持運び、青竹の埒を結て犇々と押立、添るに紅白の紙を三、四間の長さに継ぎ、星合の詩歌などを書いて、高く竹を架して是に懸ること数十枚、翻々して甚見事なり。小児等は太鼓・笛・乱拍子にて立騒ぎ、馳て暮に及ぶ

此より師匠は羽織袴にて付添ひ、続て此小児どもみな縮緬の襦袢に、同じく巾褌をかけて背後に結びさげ、股引・足袋に白の手拭を鉢巻にし、最美麗装にてねぶたを持もあり、綱を曳も有て、二十人、三十人も揃ひ、色々の囃子を同音に謡ひつれて歩行く形勢、勇ましくも愛らし（此囃子先句は百般なれ共、後句はただヲイヤ、ヨと云なり。）此次には女の子共等、同じく縮緬・上田縞の単衣に錦折の帯をしめ、髪飾り奇麗にして顔に白粉を彩り、十人、二十人手を取かはして、ぞめき歩行き、跡には乳母とおぼしきもの伊達なる作りにて付順ひ、其次は巨大のねぶたにて十人、二十人、或は浴衣なれ共、一組づつ一統の模様にて、家々の灯籠を先にたて采幣ふり、世話役と云者は己が様々の衣服を着飾り、扇を揚げて踊り歩行き、興を尽して駈廻り、賑なる事云べくもあらず。此往來先づ御奉行の門前に至り、諸吏の邸下を過て市中に至る。其間みな師匠及び高弟の先立なれば、喧嘩・口論と云ことなく穏やかに治るなり。且説、富有の者等この巨なるねぶたを称し、花と号て酒肴・菓子などを贈るに（進上・酒一樽御連中様（○に十））斯のごとく半紙に書て与ふるに、其紙をねぶたの台に幾枚も貼つけ、数多きほどは手柄となり、翌る七日卓午過より又右の通りに繰出し、其形勢宵にひとしく、百般の興有て市中を廻り、仕まひて後は海に投じて祝ひしなり。是をねぶた流しと云ふ。茲に於て、貰ひし酒肴を以て宴席を開き、角酔を尽くして帰れり。又此日師匠の宅にて強飯を焚き、肴を調ひ小児等を款待せり。又六日の夜は、市中みな燈籠を下げ、強飯などを焚て祝ひしなり。七月、魂祭に燈籠のみにて樺火焚す。墓処に至て法界するに、荷葉を用ひずして葡萄の葉を用ゆ、是をカイバと号て農家より市に売出すなり。又碑前に供ふるものみな赤飯なれば、近くに住む狄等十三日比、幾人も来りて此強飯をとりおさめ、乾飯に為して持行となり。

額ねぶたというものを男女の子どもが作り、寺子屋であろうか、師匠の元に集まり、行列を作つて町中を練り歩く様子が描かれている。ローソクやお菓子などが子どもたちに与えられる描写はないが、師匠の家では強飯や肴で子どもたちを款待していたことが記されている。ネブタも作られ、引き回されていたことが記されている。

(5) 平尾魯僊 安政3 (1856) 年か

「箱館紀行 附録」

生活の古典双書12巻に、翻刻が掲載されている。同書の森山泰太郎の解説によると、前掲の「松前紀行」の成

立後に、その内容を整理し改稿したものが「箱館紀行」であり、成立は安政3 (1856) 年と考えられる（森山1974）。当時の函館の詳細な七夕の様子が、弘前との比較を基に記されている。

七月六日の夜、七夕祭と云ふあり。男女の小児、庠校に在るもの不残一ツつ、造作へる事とそ。其形は予か方言に額ねふたといふものなれとも、甚簡略にして、小縁と大縁は表面にのみ飾り、額の当中に七夕祭と記し、両辺は画を貼り、後面には某丙氏の門人唯某と男女とも自々か姓名を書つけ、額の上には長五六尺可の葉竹を挿し、五色の紙にて作りたる短冊を数十枚結び下け、或は五色の紙を縫き、長サ七八尺、或は一丈余りにして、それに七夕の詩歌を書し、二間余りの青竹に附るもあり。又、富有の倫は張大に整備へ、飾りものは当邦と一般なれとも、櫛の組様は胃にして、予か祭礼にある山と云ふ山と云ふ物の櫛のこことくに組たて四面に幕を張り、其区にて太鼓、小太鼓、笛、鉦、三絃などを鳴らして、穏和なる拍子なり。是にもまた、其門人某と書せり。偕、この大小のネフタを己々か鬻家の門前に竹の塚を結び廻して、一个々々建並へ、小児等聚ひ寄りて笛、太鼓にて賑はかし、日も昏燈を点してより、塾師は表套褲子に帯刀し、僕に提燈を持せて先に進み、十八九可の後生等十余人同しく神外套にて左右後に列なり〔是晩生等は年たけて塾中を謝するものとそ〕其次にこの小児とも声花なる穀紗の中単に、同じく縹紗の褌袴をかけて、背後に結びさげ、腿佩襪に抹額して、ネフタを持もあり、綱を曳くも有て、二三十個、又三四十人も揃ひ、且唄ふて言ふ。某氏の門人七夕祭ヲ、イヤ々々ヨと同音に呼ひつれ、さも勇ましく歩行く。其後に女ノ児等、髪を綺麗に鬢ねて、白粉を粧ひ、一般しく縹紗の単衣に文織の帯を締め、十個はかりつゝ手を列ねて恩行客あるき、一連て大なるネフタ、或は十個二十個、又は四五十個も係り、車に曳くもあり、排着くもあり。此侶等は標外衣、或は浴衣等にて帯手巾までも一党つゝ一流の花章なるを着し、采幣振と云ふものゝ指揮に応して進停す。又、世話人と号て、灯の配賦、并に富家の贈り物など扱ひする侶のよしなるが、己か様々の衣服を穿飾り、ネフタの前に排列ひ、諧謔狂ひて伎踊るなど笑すへき事ともなり。爾して、当夜は五鼓の此の此及ネフタを内め、翌る七日英過より前伴のこことく、又々繰出し、市中大かた廻り了て、後海面に投して祝ひしなり。且説、この大なるネフタ互りしとき、富有の倫等此を賛美して花と号て酒肴、菓子など贈る輩も略有て、その書附

に〔進上 御連中様〕酒一樽〇十など記したるをネフタの標に幾枚も貼り着け、是は数多きほとネフタの誉と云へり。締畢れば、菓子は小児等に配附し、酒肴は党々の侶うち会り、燕席を開らき、興を催せしとそ。又、この日、塾師のもとにて饋飯を爨き、羹臠を調ひ、小児を勞ひ饗すとそ。又、六日の夜は戸々みな燈籠を釣るなり。

額ネフタを男女とも子どもが作り、持ち歩いたようで、屋台やネフタも登場している。子どもたちが行列を作り、「〔某氏〕の門人七夕祭ヲ、イヤタタヨ」と歌った歌詞が記録されている。財産のある家では、大きなネフタが通った際に、「花」として酒肴や菓子などを渡していたようで、終了後に子どもたちに菓子が配られ、酒肴は大人たちの宴会で食べられていた。この日に寺子屋の師匠の家では、師匠が強飯（おこわ）を炊き、あつもの（肉や野菜を入れた汁物）を用意して子どもたちを歓待する様子が描かれている。

本附録は森山の解説によると、前掲の「松前紀行」の本文中に全て組み入れられているとのことであるが、内容を確認するとそうではないことが明らかである。

(6) 杉浦嘉七か 明治期か 「附函館月次風俗補拾」

『函館市史』史料編第1巻に翻刻が掲載されている。同書の解説によると、「箱館風俗書」よりも後年の明治期に、杉浦嘉七が往時（近世）を追憶して記述したものであり、その一部に七夕行事の詳細な記述が認められる（函館市 1974：706-707）。

七夕祭 大額燈籠は方式間余りに輝子屋台やうの者を四ツ串のうへに組み立て、幕を四方に張廻して、此中、笛・太鼓・三味線等輝子方、他の人数式、三十名計りを乗せ、其上には竹を骨と紙を皮と種々の物像を製作し、像によりて種々彩色を施し、夜るは数百丁の蠟燭を点ずるが故に、光彩燦爛、製作の工みなる、彩色の鮮かなる、虎あり、象あり、孔雀あり、鯛あり。英雄の像、勇婦の姿、其他器物、翫物の類等、思ひ々々人々の好む処千差にして万別なり。此車を曳くもの数十百人。大額燈籠は幅壱間半位より三間に至り、長さ三間或は四、五間に至るが故に、街路幅の狭き処は混雑喧噪、果は彼我互に殴打等往々これあり。中額燈籠は数十人これを肩にして持行くなり。かくの如き額燈籠大中混じて三、四十或は五、六十（其年により多少の差有）、市中至る処喧々又嘩々、此他数百千の小燈籠或は五十或は百と、組を異にし、隊を分ち、童男童女綺羅を飾

り華を粧ひ、太鼓に笛に豊年万歳を唱えて市中を押廻るの有様、六日夕より七日昼にかけて人々皆狂するかと怪しむ計り。実に一年中の賑ひ此七夕祭りを以て最盛とするものなり。（大額燈籠は一家一手にて製作するもあり、又は数家組合ふて製作するもありなり）

「箱館風俗書」、「附函館月次風俗補拾」ともに、ローソクもらいを行っていたかどうかはこの記述では読み取ることができないが、子どもたちが主体となり、町中を囃し立てて燈籠などの飾り付けを押し歩いて行く様子が描かれている。ローソクもらいと共通点は、子どもが灯籠を持ち、町中を練り歩く点であり、屋台の描写などは、ネフタを想起させるものとなっている。

以上、近世の函館の七夕行事を記録した史料には、ローソクもらいの習俗は確認できず、その要素である、子どもが飾り物をつくり、市中を練り歩く行事が行われていたことがわかる。同じようにローソクはもらっていないが、寺子屋の師匠から食事の歓待、菓子をもらっていたことも確認できる。

(7) 幸田露伴 明治26（1893）年「突貫紀行」

作家の幸田露伴は、北海道余市に赴任後、明治20（1887）年に辞職して東京へと戻るが、その際の道程を題材として執筆した紀行文が「突貫紀行」である。本稿では、現代日本文学全集の第3巻に掲載された一部を抜粋して紹介する。冒頭で、小樽での七夕祭りの様子が記されている（幸田 1893：5）。

小樽に名高きキトに宿りて、夜涼に乘じ市街を散歩するに、七夕祭とやらにて人々おのおの自己が故郷の風に従い、さまざまの形なしたる大行燈小行燈に火を点じ歌い囃して巷間を引廻せり。町幅一杯まともいべき竜宮城に擬したる大燈籠の中に幾十の火を点ぜるものなど、火光美しく透きて殊に目ざましく鮮やかなりし。

子どもと明記されていないが、人々が大小の行燈に火をつけて持ち、歌い、市中を歩き回る様子が描かれている。

(8) 春秋西邑生 明治24（1891）年 「北海道札幌七夕祭りの問」

明治22（1889）年に創刊されたグラフ雑誌・風俗研究誌である『風俗画報』の第30号に、春秋による「北海道札幌七夕祭りの問」が掲載されている。札幌で見物

した七夕の様子について、ローソクもらいの行事が他の地域で存在するかどうかを誌上で質問を投げかけつつ、札幌のローソクもらいの様子が記録されている（春秋1891：20）。

問答 北海道札幌七夕祭の間 春秋西呂生

予先年北海道札幌に旅行したりき時しも旧曆七夕祭にて市中毎戸笹提灯短冊等を掲げ軒には行燈の長方形二尺計に種々の絵様ある者を点灯せり夕景に至れば七八歳乃至十四五までの小娘男童ら各々列を正して笹提灯へ点灯したる者を押たて大声に「蠟燭ダセヨ、ダサナキヤカッチャクゾ（蠟燭を与えざれば行燈を打破ると云う意の如し）と呼び歩行けり或いは又紙細工の小型なる山車を造り中に灯火を点して数名の小供等之を引あるけり此風俗は曾て東都に見さる所なり四方の諸君此土地の此風俗は他邦より移りしもの歟或いは偶然習俗となりしもの歟画報を以て博雅の君子に問う

7歳から15歳くらい男女の子どもが列をなし、笹提灯を手にもってローソクもらいの歌を歌い、街中を歩き回る、または小型の山車を造り、点灯して曳き歩く様子が描かれている。

(9) 稲垣益穂 明治37（1904）年

『稲垣益穂日誌』

稲垣益穂は小樽区稲穂尋常高等小学校の校長などを務めた人物である。彼が明治29（1896）年から昭和10（1935）年までの約40年間に記した『稲垣益穂日誌』は、様々な民俗事象が記録されていることでも知られる（山本・石川 2022：19-28）。これに、小樽花園町における、ローソクもらいを中心とした七夕行事の記載を確認することができる（稲垣 1988：3-4）。

明治三十七年八月十六日 今日旧曆の七夕であるから、市中の様子を見ようと思うて薄暮から花園町へ散歩した。郷里土佐などでは七夕は殆ど女の遊びとなつてゐるが、当地はまるで反対で、男の児の遊びである。異形の行燈をとぼして市中をあるき廻り、各戸に入りて「今年や豊年七夕祭り云々」と節白く謡ひながら舞ひこむと、家によりては門前払もするが家によると蠟燭などを与へる。これは此の異形な行燈に用ひよといふ意味であらう。仙台の方では青竹を高くかざし、それに端冊は勿論衣服の雛形や船やさまゝのものを紙でつくつてつすので、頗る壯観であるが、当小樽などでは端冊かざりは実に微々たるもので殆ど無いというてもよい位で

ある。これ一つは竹が乏しいからでもあらうが、一つは当地の風は青森式で成り立ちが違ふ様にも思はるゝ。是等の遊びは将来必ず痕跡をたつ時機が来るであらう。

男児が、行燈を持って町中を歩き回り、「今年や豊年七夕祭り云々」と歌いながら家々を訪ね、家によってはローソクなどが与えられていたことが記録されている。

佐々木が指摘していたように、「豊年予祝」のローソクもらいの歌詞が記録されている。なお、樋口による報告でも、この歌詞が記録されている（樋口 1969：238-241）。

以上、近代の七夕行事を記録した史料では、小樽と札幌のローソクもらいの習俗を確認することができる。

4 利尻町・利尻富士町の現況調査報告

(1) 利尻町・利尻富士町の概要

北海道利尻郡利尻島は、稚内市の西に位置する離島であり、利尻町は島の西側、利尻富士町は東側に位置する。利尻島では、17世紀半ば頃までには松前藩主が商船を派遣してアイヌと交易を行う商場が成立していた。近世末以降、出稼ぎの漁民が移住し、近代以降、ニシンや昆布などの漁で栄えた。現在は漁業のほか、日本最北の国立公園である利尻礼文サロベツ国立公園など、豊かな自然環境にも注目が集まっている。

明治11（1878）年に現利尻町の区域に仙法志村と杓形村が置かれ、現利尻富士町の区域に鴛泊村・石崎村・鬼脇村・本泊村が置かれた。明治35（1902）年に二級町村制が施行され、本泊村と鴛泊村が統合されて鴛泊村に、鬼脇村と石崎村が統合されて鬼脇村となった。昭和24（1949）年に杓形村は町制を施行して杓形町に、昭和31（1956）年に杓形町は仙法志村と合併して利尻町に、同年に鴛泊村と鬼脇村が合併して東利尻村となった。東利尻村は昭和34（1959）年に町制が施行されて東利尻町に、平成2（1990）年に町名が変更されて利尻富士町が誕生した（利尻富士町 1998）。

現在、利尻島へは、札幌市内の新千歳空港・丘珠空港と利尻空港を繋ぐ空路、または稚内市の稚内港フェリーターミナルと利尻町の杓形港フェリーターミナル・利尻富士町の鴛泊港フェリーターミナルを繋ぐ海路で結ばれている。明治17（1884）年には、小樽-増毛-焼尻-天売-利尻-礼文に定期航路が実現していた。

利尻町の令和6（2024）年3月31日時点での世帯数は995世帯、人口は1,792人である（利尻町 2025：4）。利尻富士町の令和7（2025）年12月末時点での世帯数は1,155世帯、人口は2,070人である（利尻富士町

2025)。

(2) 利尻町・利尻富士町の調査報告より

利尻町・利尻富士町を含む、利尻島において、ローソクもらいの詳細を記録した調査は4回行われている。①大正10(1921)年の大衆娯楽調査、②昭和62(1987)年の「利尻・礼文のわらべうた」調査(西谷聞き書き)、③『北海道民俗地図—北海道民俗文化財調査報告書—』の基礎資料となった、昭和56・57年度に実施された「北海道民俗文化財調査」④平成10(1998)年の『利尻富士町史』編さんにかかる調査、以上の4回であり、時系列順にそれぞれの調査報告の内容を確認する。その後、波田の現地調査の報告と、同地における回想録を紹介する。

(3) ①大正10(1921)年の大衆娯楽調査

利尻富士町は、大正10(1921)年の「大衆娯楽調査」の回答が綴られた歴史公文書を所蔵している。同調査は、文部省普通学務局第四課(後の社会教育課、昭和5年に社会教育局)によって実施された調査で、大正12(1923)年の関東大震災によって全国より集まった資料が消失し、統計表の一部しかのこらなかった。よって、その調査結果は活用されることがなかった。

同調査の歴史公文書を確認すると、「盆、正月、節供、等の季節に行はるる」娯楽についての設問があり、その回答には大正期の現利尻富士町(鬼脇村)の年中行事が記されている。文書番号は「鬼第三三五号」で、「大正十年二月七日」に判決(決裁)され、「鬼脇村長」から「宗谷市丁(庁)長」宛てに、「大正十年二月七日」に発送されている。文書の件名は「営利を目的とせざる公衆娯楽に関する件」で、設問は「一月二十四日付御来照の本件別紙の通り調査申報候也/追て本件に干する印刷物等無之候に付此段申請候也」とある。つまり、1月24日付で照会のあったこの件は、別紙のとおり調査したので、報告する、この件について印刷した資料等はないので、このように申請した、ということが記されている。本歴史公文書には、宗谷市丁(庁)長宛てに送付した際の写しが綴られているため、その内容を確認することが可能である。幾つかの項目の内、「◎一地方に於ける慣習的娯楽調」、「一娯楽の種類」、「(二)盆、正月、節供、等の季節に行はるるもの」の中に、「七夕祭」についての回答が掲載されており、内容は以下のとおりとなっている。

七月七日の夜男児のある家にては柳を伐り之れに式紙短冊球燈等を結び付け大なる行燈を作り(形状種々あり)其中に火を点し之れを車に乗せ太鼓石油

の空缶等を持ち打ち叩き歌を唄ひて市中を練り廻り頗る騒然なり。

二三年前迄では市内の主なるいえに至り蠟燭を強請するの弊ありしも学校より各児童等に注意するところありし結果近事其弊除去せられたり。

つまり、7月7日の夜に、男の子がいる家では、柳の木を伐り、これに短冊や小型の丸い提灯などを結び付け、大きな行燈(様々な形状がある)を作り、その中に火を点して、これを押し車に載せて、太鼓や石油を入れた空缶等を持って打ち叩いて歌をうたい、街中を練り廻り、とても騒然としている。二、三年前までは、市内の主だった家々の所で、ローソクを要求する良くないならわしがあったが、学校から児童に注意があり、その結果そのよくないならわしがなくなった、ということが記されている。同調査の結果は、利尻島内におけるローソクもらいの様子が記された最古の記録として位置付けることができる。

(4) ②昭和62(1987)年の「利尻・礼文のわらべうた」調査

名寄女子短期大学の佐藤が「利尻・礼文のわらべうた」調査を実施した(佐藤 1987)。大正2(1913)年、現利尻町(仙法志村)生まれの話者に対してわらべうたの採譜を行い、補足としてローソクもらい行事の様子も調査し、記録されている。この調査は当時、利尻町立博物館の学芸員である西谷の案内で行ったことが記されており、後に西谷の私家版『利尻の語り 先人たちの聞き語りで綴るもう一つの島の歴史』にまとめられたものに、より詳細なローソクもらいの実態が掲載されている(西谷 2010: 58-59)。

昔、七夕さんってばね、「今年しや豊年 七夕まつりよ オーイヤ イヤヨ ローソク出せ 出せよ 出さなれば カッチャクド おまけに クツクツゾ」って、子どものときに唄って歩いたもんだったね。

燈籠つくったり、額つくったりして歩いたのは男の子たちだけど、私ら女の子たちはそのあとにくっついて歩いてね。そうやってローソクもらったり、小銭もらったりしていたね。

そのとき、男の子たちは、かならず芸をひとつこしらえたもんです。弁慶・牛若丸や、楠木正成やるのに、紙鎧や兜こしらえてね。そのとことこの地区ごとでやるんだからね。そしてお金もらって、みんなして分けてね。

いつだったか、ゴンジョの末松って人がやった芸があって、それだけ覚えてるけど、文句が思い出

せなくてね。たしか、昔のなか折れの帽子かぶって、黒のマント着て、傘の柄を杖がわりにしてね。そして、「拾わんと欲っすれば なんだ 馬の糞だった」ってやったんだわ。それだけ覚えてるんだわ。とにかく、七夕さんってば、喧嘩はじまるんだわ。長浜と久連の地区どうして喧嘩したり、長浜でも一班、二班、三班ってあるから、その班どうしても喧嘩したりしてね。せっかくこしらえた燈籠や額なんかも、みんなぐちゃぐちゃにされてね、とにかく、七夕さんってば喧嘩だった。どういう訳だか、昔からだわね。

唄うたって、芸やって、そうして五銭か一〇銭もらってね。赤ダラだけれども、それもらって喜こんでまっつてね。今だら金の価値がちがってしまっつてね。あるとき、学校の先生がね、「カッチャクゾ、おまけにクツクゾ」はだめだっつて言っつてね、それで代わりのことばがあったんだけど、たしか、「何とかは実るっつてね。忘れてしまったわ。」

今は、七夕さんは柳に飾るだけだけど、昔はにぎやかでね、くつついて歩くのもの、芸をみるのも楽しみだったわね。

利尻町仙法志では灯籠や額を作った男児が中心ではあるが、女兒もともに付いて、歌を歌い、ローソクや小銭をもらって歩いてたことが記されている。また、芸の披露も行っていたり、地区ごとによる喧嘩もあり、賑やかな様子がうかがえる。学校による歌詞の変更についても記録されている。

(5) ③昭和56・57 (1981・1982) 年度の「北海道民俗文化財調査」

「北海道民俗文化財調査」は、北海道教育委員会が、昭和56・57 (1981・1982) 年度に国庫補助事業として行ったもので、約2年間に渡り、北海道内の150ヶ所を選定して民俗調査が行われた。調査は、調査票が用いられ、『北海道民俗地図—北海道民俗文化財調査報告書一』付録の『北海道民俗文化財調査要項』によると、七夕のローソクもらいについての設問は、「9.社会生活 (A) a-1 子供組にあっては、たとえばドンド焼や天神講などの行事の際だけ、一時的に結成されるものは、その旨を書く。小正月・七夕・盆・十五夜・十日夜・亥子などの折にどうするか注意する。(中略) 12.七日盆の行事、言い伝え、この日を何と呼ぶか、水浴、井戸替えなど、この日に限ってすること。盆花迎え、七夕の竹の処理方法に注意する。」以上の2つである。七夕(七月七日)は、上巳(三月三日)や端午(五月五日)の節供

とは異なり、単独での設問が設けられていない。

この調査結果は北海道民俗地図には掲載されず、小田嶋の『北海道の年中行事』で使用されていたようだ。

北海道教育委員会に問い合わせたところ、既に本調査の調査票については、所在がわからなくなっており、本調査の詳細な記録を確認することは、現在では出来なくなっている。

(6) ④平成10 (1998) 年の『利尻富士町史』編さんにかかる調査

『利尻富士町史』には、北海道博物館の前身の一つである北海道開拓記念館の学芸員であった、矢島によるローソクもらいの調査報告が掲載されている(矢島1998:119)。

七夕と盆行事 夏のもう一つの大きな行事は盆である。本町の盆行事は月遅れの八月であるが、それに先だち子どもたちの行事といえる七夕も盛んであった。八月七日に子供たちは柳の枝を切って家の前に立て、色紙の短冊に文字で裁縫の上達、学校の成績の向上などそれぞれの願いを書いて吊るし、色紙で作った紙鎖などで飾りをつけている。夕方になると、子供たちが集まり自分たちが作ったあき缶のカンテラや紙灯籠を手にして行列を作り近所の家を廻りローソクお菓子をおねだる風習があった。子供たちは声を揃えて ローソク一本だせよ、出せ出せ出せよ。出さねばカッチャクぞ、おまけに食いつくぞと歌いながら各家を訪れている。大抵の家ではこの行事のため、ローソク、菓子、果物などを用意しており子供たちに渡したのである。

利尻富士町内のどこでの記録なのかが明らかでないが、ローソクもらいの習俗が記録されている。

以上、その内容を確認したとおり、利尻町・利尻富士町をフィールドとした七夕のローソクもらい習俗の調査は4回行われ、現在では3回分を確認することが可能となっている。また、調査年代も様々で、内容についても差異が確認でき、年代による違いも確認することが可能となっている。なお、『利尻町史』通史編においても年中行事の項目を矢島が担当しているが、七夕行事およびローソクもらいは記録されていない。

(7) 令和7 (2025) 年度利尻町・利尻富士町調査

令和7 (2025) 年の8月6~8日に、波田が利尻町・利尻富士町において、ローソクもらいの現況調査をおこなった。調査の結果、既に利尻島内では行われなくなっ

た行事であったことが明らかになったが、子どもの頃に経験した方々を対象に、記憶の限りで当時のローソクもらいについて思い出してもらい、聞き書きを行った。

○男性 昭和24 (1949) 年生 利尻町杓形字日出町

自分が小さい頃 (小学校低学年くらい) に、日出町や、他の部落でもローソクもらいをやっていた。歌を歌っていたかは覚えてないが、歌詞に「かっちやくぞー」のような文言が入っていたような記憶がある。おかしをもらう行事という認識であった。高校が島外であったので、18歳 (昭和42 (1967) 年) 頃に帰ってきたが、その時は子どもたちがローソクもらいをやっていたと記憶している。いつ頃ローソクもらいが行われなくなったかはわからない。

○男性 昭和10 (1935) 年生 利尻富士町鴛泊字本町

七夕は、子どもの時にやっていた。柳の枝を採ってきて、飾り物をして、飾り、それをお盆過ぎに海に流した。家ではやらず、学校でやっていた。本町では、ローソクもらいはやっていなかったと記憶している。

○男性 昭和16 (1941) 年生 利尻富士町鬼脇字鬼脇

七夕のローソクもらいの時の歌は、「たなぼたさま」 (作詞：権藤花代) の替え歌であったと思う。歌詞は、「たなぼたまつり ろうそくだせだせよ ださねぼどんつくぞ (ださなばかっちやくぞ) おまけにかっちやくぞ (おまけにどんつくぞ)」 (内は2回目)」であった。小学4、5年生の時に、鬼脇の何人かで北見神社から出発し、リヤカーを4、5人で引きながら歌を歌いながら家々をまわった。この集団は、町内会などの組織ではなく、親しい子どもたちが自発的に集まる。終戦後であったため、菓子などはなく、ローソクだせよ、となった。菓子をくれる家もあり、それはもらった。柳の木を立てて、願い事書いた短冊を付けた。ローソクもらいは、戦後に始まり、小学3・4年生の時にはじめて、中学1・2年生頃までやっていると記憶している。はじめたきっかけは覚えておらず、この行事をどこで知ったかもわからない。「なんとなく」はじめたように記憶している。自分より上の世代は、戦時中なのでやっていなかったと思う。

○女性 昭和17 (1942) 年生 利尻町仙法志字神磯

七夕は、小さいときにやっていた。七夕の飾りは海に流していた。家で短冊飾りを書いて、折り紙で輪型の飾りや果物の形の飾りを作っていたような気がする。「七夕まつり」という文言を書いた。七夕飾りは8月7日の朝に飾り、8月8日の朝に流す。柳の木は親に採ってきてもらう。男の子はやっていたかもしれないが、ローソクもらいを自分がやった記憶はない。

以上、戦時中には行われていなかったようだが、利尻町・利尻富士町内の地区によって、ローソクもらいの実

施・非実施が分かれていたものと考えられる。利尻町杓形字日出町では、昭和42 (1967) 年頃まで実施されていたことを確認できた。

(8) 武田豊作 昭和57 (1982) 年

『利尻を思う』より

武田は、明治40 (1907) 年生、利尻島鴛泊へ移住し、幼少期を過ごす。本書は武田による鴛泊在住時代の回想録であり、自身が経験したローソクもらいについての記述が掲載されている (武田 1982: 38-40)。

七夕祭の思い出は多い。

今年豊年 七夕祭よ オーイヤ イヤヨ

ろうそく出せ 出せよ

出さねばかっちやくど

おまけにくいつくど

何と素朴な文句だろう、こんな文句を叫んで番屋から番屋へと門付けして廻って、ろうそくを貰って歩くだけだったが、豊年は豊漁に通ずる掛声であって漁場にとっては豊漁への感謝の気持でろうそくを呉れるのである。

貰い集めたろうそくは分配して持ち帰ったり雑貨店で金に替えてみんなで分配した。後になって (出さねばかっちやくど、おまけにくいつくど) の文句は学校から禁止令が出て叫んで歩くことは止めたが、その代り軍歌や学校の唱歌を唄って、暗い夜道を一団となって廻り歩いたものだ。暗い夜道を練り歩くためだったのかめいめい手造りの田楽灯籠にろうそくを灯し、部落毎に集団を作り声も枯れよと軍歌を合唱しながら隣の部落まで出かけることも珍しくない。そんな時どこの部落にも餓鬼大将が居て、暗の中から石礫が飛んで来て折角造った田楽灯籠の紙が破かれたり、時には大人が手を貸して造って呉れた大型の立派な田楽灯籠など持ち出したら真先に狙われて壊されたりした。暗い夜道のこととて誰がやったか判らないし、相手が強くてかなわぬと見れば一目散に夜道を飛んで部落に帰った。街灯などなかった頃のことだったので道路の石ころにしたたか膝小僧を打ちつけて泣くにも泣けず帰宅し傷の手当をしたこともある。後で考えついたことだが、子どもには子どもの縄張りがあったわけで、隣部落までろうそくを貰いに出かけたらこんな目に会うのも当たり前のことだとあきらめた。

他の記録と異なり、ローソクもらいの喧嘩について、重点を置いた記述がなされている点に特徴がある。

(9) 佐藤友吉 平成21 (2009) 年『俺一代』より
佐藤は、大正8 (1919) 年、利尻町杵形生まれの漁師で、『俺一代』は90歳の時に語り・記した話をまとめた回想録で、自身が経験したローソクもらいについての記述が掲載されている (佐藤 2009 : 42-43)。

七夕祭り 子どもの頃、八月七日・八日の「七夕」が近づくと、仲が良い者六・七人集まって灯籠みたいな物を作った。笹竹で骨を組みそれに紙を張って絵を書いた。中にろうそくを立て灯りをともした。形は丸や四角、熊手のような物を作る組もあった。できた物に一メートル五十くらいに切ったサキリを付けて、持ち手にした。学校から帰って時間があれば集まって作った。細工が上手だったり、絵が上手だったりそれぞれに得意な事を担当してやった。色付けのため食紅を持ってくるように言われ、家から持ち出そうとして、母親にこっぴどく怒られた事があった。組の中には必ず一人年上で力のある奴が居て、街の中で組同士ぶつかり合った時に守ってくれた。灯籠を掲げ「今年は豊年だー満作だー」と歌って各家々を回って歩いて、ローソクやお菓子・お金をもらった。お金は五銭が普通通だったが十銭もらえた時もあった。家の前には柳に短冊の飾りをしたり、小さい子達も浴衣にシゴキ、ちょうちん持って歩いた。

八日には柳やら作り物を海に流しに行った。本当に賑やかだった。

家の前に立てた柳の木に短冊飾りを付けた七夕飾りの絵を描いており (図2)、後述するが、現在の利尻島内の七夕飾りとの比較を行うことが可能である。

以上のとおり、調査時点において利尻町・利尻富士町では、七夕のローソクもらいの習俗は行われていなかったが、大正10 (1921) 年から現在に至るまでの調査報告を確認することができた。柳の木に短冊飾りを付ける習俗については、利尻町の本庫屋書店 (利尻町杵形字緑町) の店先のみであったが、佐藤の図との比較を行うことで、新旧の様態の差を明らかにすることができる (写真1-3)。

5 札幌市白石区の現況調査報告

(1) 札幌市白石区の概要

札幌市白石区は、札幌の東側に位置する。その成り立ちは、明治4 (1871) 年に仙台藩白石城主片倉小十郎の元家臣67名が移住したことに始まる。明治期に郷里の

名をとって「白石村」となり、昭和25 (1950) 年に札幌市へと編入、札幌市が政令指定都市に移行した昭和47 (1972) 年に「白石区」となった。区の東西に国道やJR函館本線及び千歳線、札幌市営地下鉄東西線が通り、交通網の発達した地域で、大型のショッピングセンターなどもある繁華な地域である。調査を行った令和7 (2025) 年8月時点での世帯数は114,111世帯、人口は212,096人である (札幌市 2025)。令和2 (2020) 年時点での産業別人口の割合は、第3次産業就業者が83.2パーセントを占めている (令和2 (2020) 年国勢調査より)。

今回調査を実施した地区は、同区の東札幌第三町内会及び第四町内会である。二つの町内会が合同で「七夕まつり」を令和7 (2025) 年8月3日 (日) の16時30分から実施した。町内への周知のために配布されたチラシに「☆夏フェス☆ 七夕まつり～ローソク出せ」とあるように (図3)、ローソクもらいが行事の中心である。参加者は事前申し込み、集合場所は両町内会が接する通りに位置するマンションである。

両町内会では、今回が初めてのローソクもらい実施である。それまでは第三町内会にある大型スーパーマーケットの敷地内で盆踊りを夏の行事として実施していた。この盆踊りは盛況で、町内会の範囲外からも多数の人が訪れ参加するため、運営に大きな負担がかかっていた。また、例年開催している場所の確保が難しかったことから、町内会の住人を対象とした子ども向け行事の実施へと変更することとなった。行事がローソクもらいとなったのは、夏の行事であること、町内会の役員らが子どもの頃経験したことの行事であったことが理由である。

(2) 行事の流れ

参加者は、集合場所のマンションの外に設置された受付所で受付を行う。それをうけ、担当者が参加者をエレベーターへ乗せ、上の階へと誘導した。エレベーターを出てすぐのところに、机と椅子、様々な色のペンと短冊が用意されたスペースが設けられており、参加者はそこで自身の願い事を短冊に記入し、その場に設置されている笹へと結びつける。

それが終わると、同じ階の別の部屋に誘導される。その部屋では、子どもたちがそれぞれ「オリジナルちょうちん」を飾り付ける (写真4)。このオリジナルちょうちんは、使い捨てのプラスチックコップにセロハンや油性ペン、シールなどで飾り付けを行い、コップの中に電池式のローソクを入れ、モール (針金に糸が巻き付いたラッピング資材) を通し、持ち手となる割箸に括り付ける。

オリジナルちょうちんを作り終えた子どもが5人ほどになったら、首からスタンプラリーの台紙を掲げ、部屋を出たところで町内会の担当者の指導のもと「ローソクもらいの歌」を練習する。歌詞は下記のとおり。

ローソクだーせーだーせーよー
だーさーないとかっちゃんぞ
おーまーけーに食いつくぞ

この時一緒に歌った5～6名をひとグループとし、役員1名及び子どもの親とで、マンションを出て、ローソクもらいに対応してくれる家々を回り始めた。

ローソクもらいは、訪ねた家からお菓子などをもらうことになっているが、住人が不在であったり、そもそもローソクもらいになじみのない住人だと用意も対応も難しいため、事前に対応してくれる住人を募り、その家々を訪ねるルートを記載したマップを作成していた（写真5）。

対応してくれる家に到着すると、帯同している役員がインターフォンを鳴らし、ローソクもらいで来た旨を住人に伝える。住人が家から出てくると、子どもたちは役員に促され、ローソクもらいの歌を歌う（写真6）。歌い終わると、住人がお菓子を子どもたちに渡し（写真7）、首から下げているスタンプ台紙にスタンプを捺す、あるいはペンでチェックを入れる。それを繰り返し、最終的に受け付けのあった会場へと戻り、参加者はそこで終了となる。役員は、すべてのグループが戻り次第、片付け、行事は終了となった。

6 札幌市東区の現況調査報告

(1) 札幌市東区の概要

札幌市東区は、札幌市の北東部に位置し、明治35（1902）年の町村制で成立した札幌村の区域とおおよそ一致する。この札幌村のあたりは、慶応年間には幕府直営農場建設のため水路が整備され、農業用水の確保も早くからなされたことから、明治期以降は玉ねぎ生産などの農業を中心とするエリアとなっている。昭和30（1955）年には、全区域が札幌市域となり、現在に至っている。

調査を行った令和7（2025）年8月時点での世帯数は135,770世帯、人口は263,885人である（札幌市2025）。現在でも玉ねぎ生産で有名な地域ではあるが、令和2（2020）年時点での産業別人口の割合は、第3次産業就業者が83.0パーセントを占めている（令和2（2020）年国勢調査より）。

今回は栄町東町内会と玉宝町内会との合同で行なわれた。ここでは栄町東町内会の当日の様子を紹介する。今回行事を取り仕切った役員の一人（男性、50代）によれば、

彼が子どもの頃にもローソクもらいを行っていた。ただし、現在のように大人が取り仕切るのではなく、8月7日になると子どもたちが自主的に集まり、家々をまわっていた。現在のようなかたちになったのは、町内の子ども会で行うようになったおおよそ10年前からであり、この行事のことを「ろうそくだあせ」と呼んでいる。

(2) 行事の流れ

当日は地域の会館に集合し、町内会の子ども会の役員が参加者の受付を行った。栄町東町内会は子供だけで83名、二つの町内会及び親も含めると200名余りが参加した。まず、願いを書いた短冊を笹につける。その後、5～6名がグループとなり、そのうち1名に、訪ねて良い家が記載された地図（写真8）と、地図に印をつけるためのペンが渡された。その後、役員から全体へと行事の流れが説明される。①栄町東町内会の子どもたちは町内会の北と南の地区を周ること、②北側の地図をもらったグループは、北側の対応をしてくれる家々を回ること（南側のグループは南側の家を回る）、③周り終わって北側の地区も行きたくれば、決まった場所に行って南側の地図をもらい、南側の対応をしてくれる家々を回ること、と説明がなされ、お菓子をもらうために必ず歌わなければならないというルールが伝えられた。それを受けて、全体での歌の練習が行われた（写真9）。この地区でのローソクもらいの歌の歌詞は下記のとおり。

ローソクだーせーだーせーよー
だーさーないとかっちゃんぞ
おーまーけーに食いつくぞ

歌を2回歌ったところで、5～6名程度のグループを作り、輪になるよう促される。グループに入っていない人がいないか確認したうえで、グループごとに地図を確認する。地図は、北側と南側いずれかの地区のもので、それぞれ訪問してもよい家に印がつけられている。あわせて「ろうそくだあせのルール」として、「グループの人たちとなかよく回る」、「☆（筆者註；赤色の星）のついておうちの人のところに行く」、「歌を歌って、おうちのひとが出てきたら元気よくあいさつする」、「おかしをもらったからおれいを言う」、「急に走ったり、グループからかってにはなれない」「コンプリートしたら☆（筆者註；青色の星）のおうちに行こう！」、「何かこまったことがあったら（筆者註；空欄になっている）の人につたえる」と書かれている。

グループごとに地図を確認したところで、取りまとめの役員から、皆最初に老人福祉施設に行くことや、その後各家をまわる際の注意点が説明された。その後もう一度歌を歌った後、出発となった。歩道に出るところで、役員からお菓子やおもちゃ（プラスチック製の棒）が渡

され(写真10)、老人福祉施設まで皆で歩いて行く。各グループには大人(概ねそのグループ内の子どもの親)が1名程度ついている。

老人福祉施設に到着すると、グループごとに玄関の中へと入り、ローソクもらいの歌を歌う。歌い終わったあとお菓子を受け取り、各家を回り始める。各家でも、老人福祉施設と同じように、歌を歌い(写真11)、お菓子を受け取り(写真12)、お礼を言うという流れは同じである。ただし、決まったルートはなく、グループのメンバーで話し合いながら、どこに向かうか決めていく。それぞれのグループには親が一人以上ついているものの、見守るだけで口を出すことはしない。訪問先は個人宅が多かったものの、地元の企業の事務所もあった。

今回ついて行ったグループは、北側のルートを回ったあと、南側の地図をもらい、南側の家々も回った。18時が全体の終わりの時間となっており、18時近くなると親たちが途中であっても終了を促した。18時以前であれば、終了のタイミングは自分たちで決めることができ、グループごとに解散となった。町内会の役員は、その後片付けを行い、行事は終了となった。

7 おわりに

以上、北海道七夕行事「ローソクもらい」を巡る先行研究史と現況調査報告を行った。ローソクもらいの習俗は、その伝播や歌詞に注目が集まり、多くの研究者達がネブタを中心に、青森県との比較検討を行っていた。近世の文献では、箱館・松前地域の七夕のネブタの詳細が記されているが、ローソクもらいを行っていた、という直接の記述はなく、近代以降の文献で散見されることが明らかになった。

利尻町・利尻富士町では地域によっては大正期には行われていた。戦時中は空白期間であったようだが、戦後は再び実施される地域もあり、少なくとも昭和42(1967)年頃まではその存在を確認することができたが、現在では、その姿を消した。

札幌市白石区では、子ども向けの夏の行事として、盆踊りからローソクもらいへ変更となり、新たに今年からはじまった行事の詳細な実態が明らかとなった。

札幌市東区では、子ども主体の行事から、大人主体の行事への変換点が明らかになっており、様々な問題が生じないように、ルート設定が決められるなど、形を変えながらも伝承される様相を確認できる。

引用・参考文献

池田 2013: 池田貴夫『なにこれ!?北海道学』北海道新聞社、2013年、pp.11-12

- 稲垣 1904: 小樽市博物館 編集 小樽市博物館シリーズNo.13 『稲垣益穂日誌』十巻、1988年、pp.3-4
- 蛭子か 1854頃か: 蛭子七左衛門か「箱館風俗書」函館市『函館市史』史料編 第一巻、1974年、p.702
- 小田嶋 1996: 小田嶋政子「七夕」「ローソクもらい」北の生活文庫企画編集会議編 北の生活文庫6『北海道の年中行事』北海道、1996年、pp.165-171
- 幸田 1893: 幸田露伴「突貫紀行」現代日本文学全集 第3『幸田露伴集』筑摩書房、1954年、p.5 (初出は『枕頭山水』博文館、1893年)
- 小寺 1981: 小寺平吉「七夕」北海道新聞社編集『北海道大百科事典』下巻、北海道新聞社、1981年、p.52
- 佐々木 2022: 佐々木優香「北海道の七夕行事「ローソクもらい」の囃子歌に見られる伝承過程について—小樽の事例をもとに—」小樽市総合博物館『小樽市総合博物館紀要』第35号、2022年、pp.29-40
- 佐藤 1987: 佐藤志美子「利尻・礼文のわらべうた」『地域と住民』第5号、1987年、pp.55-77
- 佐藤 2009: 佐藤友吉『俺一代』私家版、2009年、pp.42-43
- 札幌市 2025: 札幌市「統計さっぽろ(月報)」令和7年10月号 2025年
(<https://www.city.sapporo.jp/toukei/geppo/geppo.html>)
- 春秋 1891: 春秋西邑生「北海道札幌七夕祭りの問」『風俗画報』第30号、1891年、p.20
- 杉浦か 明治期か: 杉浦嘉七か「附函館月次風俗補拾」函館市『函館市史』史料編 第一巻、1974年、pp.706-707
- 武田 1982: 武田豊作『利尻を思う』札幌鴛泊会、1982年、pp.38-40
- 蛸島 1986: 蛸島直「ローソク出せ出せよ—民俗のひとり歩き—」『日本民俗学』第166号、1986年、pp.49-68
- 田中 1999: 田中宣一・宮田登編『年中行事事典』三省堂、1999年、pp.242-245
- 中山 1938: 中山徳太郎『佐渡年中行事』民間伝承の会、1938年、pp.171-172
- 西谷 2010: 西谷榮治『利尻の語り 先人たちの聞き語りで綴るもう一つの島の歴史』私家版、2010年、pp.58-59 (初出は「広報りしり」208号、1988年)
- 樋口 1969: 樋口忠次郎「現地レポート 小樽地方の童唄(一)」『民間伝承』第32巻第4号、1969年、pp.238-241
- 平尾 1855か: 平尾魯僊「松前紀行」函館市『函館市史』史料編 第一巻、1974年、pp.293-294
- 平尾 1856か: 平尾魯僊「箱館紀行 附録」森山泰太郎校訂 生活の古典双書12『洋夷茗話・箱館紀行』八坂書房、1974年、pp.184-186
- 北海道 1969: 北海道編『新北海道史』第7巻 史料一、新北海道史印刷出版共同企業体、pp.605-616
- 北海道教育庁社会教育部文化課 1983: 北海道教育庁社会教育部文化課 編『北海道民俗地区—北海道民俗文化財調査報告書—』北海道教育委員会、1983年、同書所収「北海道民俗文化財調査要項」pp.11-23
- 松浦武四郎 1850: 吉田武三校注『三航蝦夷日誌』下巻、吉川弘文館、1971年、pp.494-495
- 文部省社会教育局 1933: 文部省社会教育局「全国農山漁村娯楽状況(上)」『民衆娯楽調査資料』第六輯、1933年、p.1
- 矢島 1998: 矢島睿「七夕と盆行事」利尻富士町史編纂委員会『利尻富士町史』利尻富士町、1998年、p.119
- 柳田 1938: 柳田國男「序文」中山徳太郎『佐渡年中行事』民

間伝承の会、1938年、pp.12-13

山崎 2013：山崎福太郎「函館市の七夕行事「ローソクもらい」の実態」国立大学法人信州大学 教育学部自然地理学研究室『2011年度地理学野外実習報告書IV 函館』2013年、pp.56-65

山本・石川 2022：山本侑奈・石川直章「『稲垣益穂日誌』小樽の近代史を示す同時代史料」『小樽市総合博物館紀要』第35号、2022年、pp.19-28

利尻町史編纂委員会 2000：利尻町史編纂委員会編纂・利尻町史編集室編集『利尻町史』通史編、利尻町、2000年

利尻町 2025：利尻町「利尻町勢要覧」資料編 2025年
(https://rishiri-town.jp/wp-content/uploads/2025/07/youran_siryuu_20250601_1.pdf)

利尻富士町 2025：利尻富士町「利尻富士町WEBサイト」
(<https://www.town.rishirifuji.hokkaido.jp/rishirifuji/dd.aspx>)



図1 ローソクもらいの分布 (小田嶋 1996 : 171)



写真1 書店前の七夕飾り [利尻町]



写真2 柳の木の七夕飾り [利尻町]

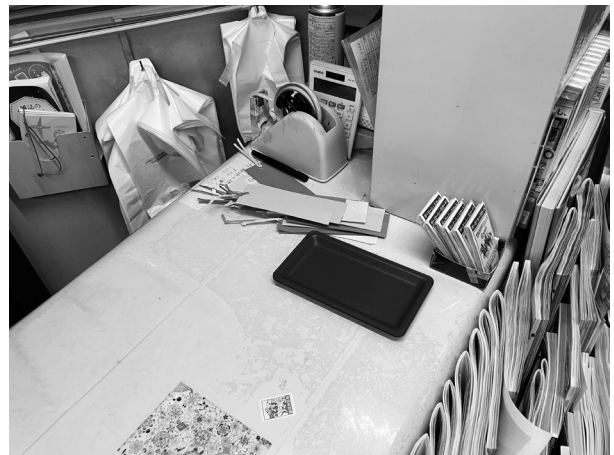


写真3 書店内に短冊が置かれている [利尻町]

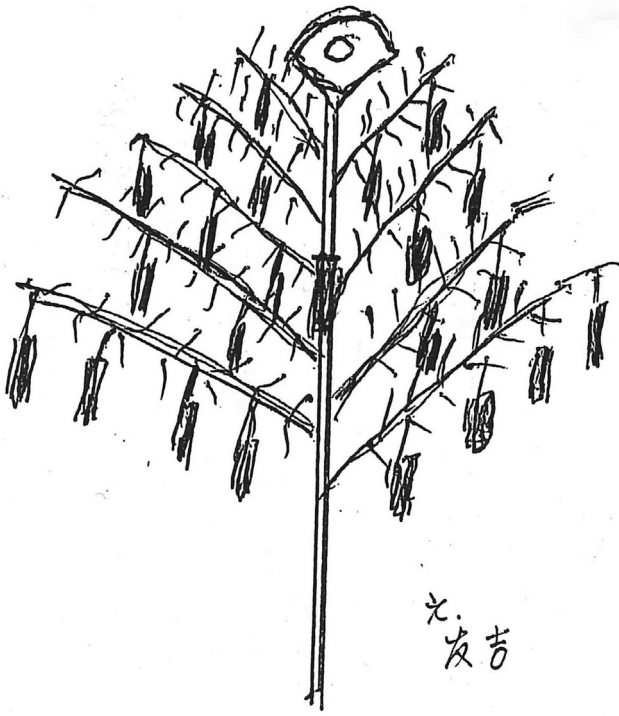


図2 大正期の七夕飾り [利尻町]



図3 町内への周知のために配布されたチラシ [札幌市白石区]



写真4 オリジナル提灯づくり [札幌市白石区]

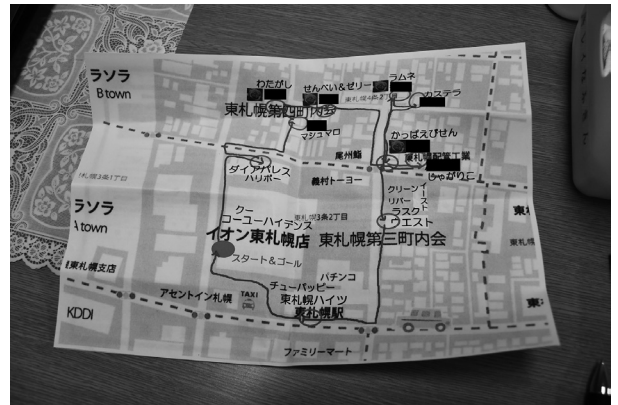


写真5 訪問先のマップ [札幌市白石区]



写真6 玄関先でローソクもらいの歌を歌う [札幌市白石区]



写真7 歌い終わり、お菓子を受け取る [札幌市白石区]



写真8 訪問先のマップ [札幌市東区]



写真9 全体でローソクもらいの歌の練習をする [札幌市東区]



写真10 出発前にお菓子を受け取る [札幌市東区]



写真11 ローソクもらいの歌を歌う [札幌市東区]



写真12 歌い終わり、お菓子を受け取る [札幌市東区]

Review of Previous Research and Surveys of the Current Status of the Tanabata Custom *Rōsoku-morai* (“Candle Receiving”) in Hokkaido

HADA Naohiro and OMAGARI Kaori

In some Tanabata celebrations in Hokkaido, a custom known as *rōsoku-morai* (“candle receiving”) is practiced. Tanabata customs across Japan encompass a variety of elements. However, with regard to *rōsoku-morai*, which is widely distributed in Hokkaido, the full extent of the practice remains unclear, including in which regions of Hokkaido this custom is currently practiced, and what the custom specifically entails.

With the aim of clarifying part of the actual conditions of *rōsoku-morai*, this paper presents: (1) an analysis of how Tanabata celebrations in Hokkaido are depicted in early modern and modern historical sources; (2) a review of the history of previous research on *rōsoku-morai*; (3) documentary sources and reports from field surveys on *rōsoku-morai* in Rishiri Town and Rishirifuji Town; and (4) reports on surveys of the current status of *rōsoku-morai* in Shiroishi Ward and Higashi Ward of Sapporo

City.

Our examination has clarified the following points:

(1) The custom of *rōsoku-morai* is not directly depicted in the sources investigated.

(2) Previous research has focused on areas such as the custom's transmission and song lyrics, and has been conducted primarily through comparisons with Aomori Prefecture.

(3) In Rishiri Town and Rishirifuji Town, the custom can be confirmed from the Taishō period (1912–1926). It was suspended during the war, and thereafter continued to be practiced until around 1967.

(4) In the urban area of Sapporo's Shiroishi Ward, the custom was initiated as a new event for children, while in Higashi Ward it transformed from a child-centered activity to an adult-centered activity.